Mito City International Association

（公財）水戸市国際交流協会機関紙
第43号
2012.10

ありがとうを届けに
水戸市学生親善大使がアナハイム市を訪問

7月27日から8月5日までの10日間、水戸市学生親善大使10名が、水戸市の姉妹都市であるアメリカ・カリフォルニア州アナハイム市を訪問してきました。

昨年の東日本大震災発生後、アナハイム市から3,200通をこえる「ガンバレ！MITO！」の応援メッセージが届いてから（機関紙40号掲載）、水戸市民によるアナハイム市訪問は今回が初めてとあって、アナハイム市へ感謝の気持ちを伝える親善訪問となりました。学生親善大使たちは、東日本大震災について発表する機会を設け、水戸市の被災状況や体験談とともにアナハイムから届いた応援メッセージに対する感謝の気持ちをアナハイムの人たちに伝えてきました。

そのほか、水戸市の代表としてアメリカの歴史や文化を学び、アナハイム市役所や消防署などを視察し、アナハイム市への理解を深めました。また、市内の小学校の訪問、ホームステイなどを通じて、アナハイムの人たちと直接ふれあい、心を通わせました。

こうしたアナハイム市民との交流や施設の視察を通して、水戸市とアナハイム市はまた一歩、友情の絆を深めることができました。

日　程	
7月27日（金）	カリフォルニア州アナハイム市へ
7月28日（土）	ホストファミリーと過ごす、親睦パーティー
7月29日（日）	エンゼルスタジアム視察、大リーグ観戦
7月30日（月）	サンキスト小学校および消防署訪問、ボウリング大会
7月31日（火）	市長表敬訪問、ビーチでの1日、キャンプファイアー
8月1日（水）	市役所視察、MUSEO見学、市議会議場見学、ネイチャーセンター視察、ゴルフコース視察
8月2日（木）	ディズニーランド
8月3日（金）	さよならパーティー
8月4日（土）・5日（日）	帰国

アナハイム市長（中央）との記念写真

Mito City International Association

事業報告

◆つくってみよう！世界の料理（6月16日）～中国・東北料理編～

国交正常化40周年である中国にスポットをあて、身近な食材を使った本場の中国・東北家庭料理作りを通して、相互理解を深めました。

◆親と子の国際講座（6月30日）～世界の誕生日の祝い方～

小学生と保護者が、誕生日をテーマに、ゲームやクイズ、料理作りを通して世界各地の文化や習慣について、楽しみながら理解を深めました。

◆世界の歩き方講座（7月3・10日）～イギリス編～

「もっと楽しむロンドン五輪」と題し、夏季五輪の迫るイギリスの歴史、文化、街のみどころなどについて学びました。

◆花火鑑賞会（8月3日）

国際交流センターに外国人と市民が集い、黄門まつりの花火鑑賞と盆踊り（黄門囃子）を楽しみました。

◆サマークラスforジュニア（8月26日）～韓国編～

小学校高学年生から中学生を対象に、伝統服から現代音楽まで幅広く韓国について理解を深める講座を開催しました。

お知らせ

◆ホームページ上にメッセージボードを開設

「外国の人と交流したい」、「語学の先生を探しています」など、みなさんが情報交換できるメッセージボードを当協会ホームページに開設しました。どなたでもご利用いただけますので、このメッセージボードをとおして、国際交流の輪を広げてみませんか？

http://www.dss104.org/mcia/imb/yybbs.cgi

※お願い：利用規約に同意のうえご利用ください。

※水戸市国際交流センター2階ロビーに設置しているメッセージボードも、これまでと同様にご利用いただけます。

今後の行事予定

◆世界の歩き方講座～イタリア編～

「美術」の切り口からイタリアの文化や歴史を学びます。
10月31日(水)・11月7日(水)開催

◆ホビングリッシュ講座～文学編～

趣味（ホビー）を通して英語（イングリッシュ）を学びます。今回は「文学」をテーマに、外国人講師と英語で現代小説を読み、朗読や議論を楽しみます。
11月17日（土）開催

◆親と子の国際講座～体験！世界の学校！～

小学生とその保護者が、クイズや遊び、料理作りを通して「世界の学校」について学びます。
12月8日(土)開催

【外国人対象】For Foreign Residents

◆外国人のための日本料理教室～Japanese Cooking Class～

秋の食材を使い、手軽に作れる日本料理を作ります。
11月10日（土）開催

◆市内ウォッチング　～City Tour～

酒造見学やそば打ち体験、お菓子博物館見学など、水戸市周辺の「食」をテーマにした日帰りツアーです。
11月29日（木）

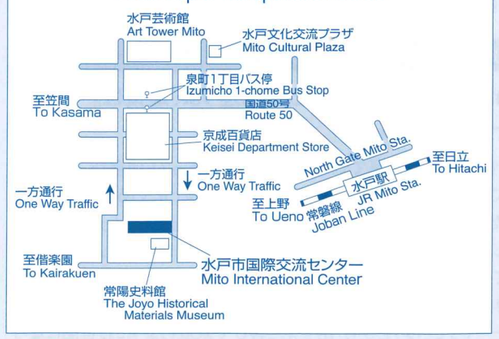
◆スキーツアー　～Ski Tour～

白銀の世界でスキーを楽しみます。
2月予定

◇機関紙へのご意見やご感想をお待ちしています。

開館時間：午前9時から午後9時まで
休 館 日：月曜日、祝日（土曜日を除く）
〒310-0024 水戸市備前町6-59
水戸市国際交流センター内
（公財）水戸市国際交流協会
Tel:029-221-1800 Fax:029-221-5793
http://www.mitoic.or.jp/
E-mail:mcia@mito.ne.jp

水戸市国際交流センター案内図
Area Map & Transportation Guide



地球環境に優しい「大豆油インキ」を使用して印刷しております。
(Printed by KOWA PRINTING Co.LTD.)
PRINTED WITH SOY INK

＜平成24年度水戸市学生親善大使＞

菊池　莉緒（中学2年）　鈴木　瑠夏（中学2年）　東　裕子（中学3年）
平野　瑞葉（中学3年）　片岡　宏（高校1年）　黒木　理沙（高校1年）
深谷 奈津子（高校1年）　猪瀬　悠（高校2年）　金　永珠（高校2年）
西野　亮太（高校2年）　団長　森 久美子（緑岡中学校教諭）

インタビュー　水戸市学生親善大使

―水戸市学生親善大使のアナハイム市への派遣は、1988（昭和63）年に始まり、今年で22回目。今年度の親善大使を含め、これまでに433名がアナハイム市を訪問し、友好交流を行っています。

水戸市学生親善大使に聞く　―アナハイムで過ごした10日間とは―

（左から）「ホームステイはもちろん、親善大使としての任務を果たせることも魅力のひとつでした」という西野君、「ホームステイで、現地の人のリアルな生活や習慣を体験してみたかった」という平野さん、「夏休みの中で一番充実していた10日間だった」という金さん

得たものは「自信」

西野 亮太（高校2年）

実は、出発前、電子辞書はもちろん持っていく準備はしていたけど、この電子辞書の電池が切れちゃったら自分はどうなっちゃうんだろうって思って、かばんに予備の単3電池まで用意していたんです。あの10日間で、ホストファミリーはもちろん、いろいろな人と話す機会があったけど、電子辞書を使ったのは結局1回か2回くらいでした。実際に英語で話してみて感じたのは、電子辞書を使うと、コミュニケーションがどうしても一時的に中断してしまうってこと。それはコミュニケーションや会話の理想的な形ではないので、電池の予備まで持っていったけど、結局、電子辞書は使いませんでした。身振り手振りで無理やりなところもあったけど、辞書に頼らなかったことで会話が一方通行にならずに話をすることができていたと思います。

英語が好きなので学校ではESS部に所属していますが、帰国子女や英語がうまい人がたくさんいるんです。そういう中で、自分ってどのくらいの位置にいるんだろうって、勝手にランク付けしている感覚があったんです。だけど、向こうに行ってみて、「世界は広かった」って感じました。それこそアメリカだから人種も多様で、個性も人柄もそれぞれで、やさしく英語で対応してくれる人もいれば、英語でさらっと言われて、聞き取れないこともありました。でも、全体を通してみて、電子辞書を使わずに、ただただしゃべっても、会話が一方通行にならないコミュニケーションの理想的な形をなんとかとることができていたと思います。最初はお客様扱いだったホストファミリーとも徐々に溶け込んでいって、最後は家族同然みたいになれたのも、こうしたコミュニケーションあってのことだったと思ったんです。だから、ランク付けとか意味なくて、「自分は自分」って思えるようになったから、自信がついたのかなって思います。

ホストファミリーと

感じたことは「親切」

平野 瑞葉（中学3年生）

私のホストファミリーは、日本から一人で来た英語もあまり話せない、マナーだってあまりなってない、文化も違う私を全部受け入れてくれました。シアトルに住んでいる息子さんのお嫁さんが日本人なので、彼女に日本風の味付けや、日本食のレシピを聞いておいて、それを作ってくれたこともありました。親にメールを送ろうとしたときに、日本語で送ろうとしたらうまくできないことがあって、パソコン関係の仕事をしているらしい息子さんに電話して聞いてくれましたが、英語だとよくわからないから、その日本人の奥さんに代わって、すごく親切に教えてくれたこともありました。それだけでもありがたかったのに、「またわからないことがあったら、いつでも電話していいよ」って、すごく夜遅かったのに言ってくれて。ホストファミリーだけじゃなくて、例えばスーパーのレジの人も、私がアメリカドルの使い方に慣れていないから時間がかかってしまったときも待っていてくれたということもありました。

今回のアナハイム訪問は、私にとって初めての海外だったので、最初は不安ばかりでした。でも、行ってみたら、こんなふうにホストファミリーが本当の家族みたいに受け入れてくれたし、言葉がうまく通じなくてもいろいろな場面で優しい心を感じたので、心配とか不安がなくなっていきました。アメリカにはいろいろな人種の人がいて、様々な人たちと接しているからなのか、親切っていうか、寛大・寛容っていうか。アメリカはいろんな文化や宗教とかがあって、だからこそ誰に対しても親切に受け入れてくれるのかなと思いました。

ホストファミリーと

学んだことは「勇気」

金永珠（高校2年生）

よく「チャンスは自分で切り開かなくちゃいけない」とか言いますよね。新しいことを経験できるチャンスってたくさんあるけど、自分に勇気がなくて一歩踏み出せないまま諦めちゃったり、知りたいことがあってホストファミリーに聞いてみたいけど、恥ずかしいし、あとで調べればいいかなって尻込みするのは、せっかくあるチャンスも自分で拒否してるってことじゃないかなって、この10日間ですごく思いました。自分次第で、楽しくもなるし、つまらなくもなるし、有意義にもなる。結局、自分次第なんだなって。今回親善大使に応募するのも、学校のイベントもあったので、どうしようかなってすごく迷ったんです。でも、いろいろな人の後押しと、ちょっと勇気を出して応募したからこそ、こんなにいい夏休みになった。だから、ほんの少しの勇気で、その先は結構変わるんだなっていうことがわかりました。ちょっと嫌なことあっても、自分で全然気にしないで、前に進もうって思えば楽しくなるけど、恥ずかしいし今日はいいやって思ってしまうと、どんどんチャンスはなくなってしまう。何でもそうなのかなって思いました。だから、これからは、ためらってるんだったら、やってみようかな、前向きにいきたいなって思いました。間違えちゃっても、自分が言ったことが、後から考えてみたら失礼だったかなとか、英語が間違って聞いてるほうはちんぷんかんぷんだっただろうなって、落ち込んだり、後悔することはあっても、やらないよりはやってよかったなって思えるようになりました。

ホストファミリーと

団長
森　久美子先生
（水戸市立緑岡中学校教諭）

ホームステイと海外旅行の違いは、人とハグができるかできないか

海外旅行では、人と親密な関係を築くことって難しいと思うんです。だって必要なこと言ったら事足りてしまうから。買いたい、見たい、食べたい…、自分が何かできればいいわけで、特別親しい人と長い話をするわけではないし。でもこの姉妹都市交流事業は、授業を担当してくれた先生がいて、姉妹都市委員会の関係者や多くのファミリーの方々と何回も会う機会がある。その中でいろいろなお話もできる。だから最後のお別れのときには、みんな別れを惜しむハグができた。そこが海外旅行とは決定的に違う。こういうことが学生時代に経験できたあの10人の子どもたちは幸せだと思うし、あの場でともに味わえた感動は一生忘れないと思う。

そう語るのは、森久美子団長。事前研修会から学生親善大使を一番近くで見守ってきた森団長にアナハイムで過ごした10日間についてお聞きしました。

―学生親善大使たちに、学んで欲しかったこと

失敗を恐れて尻ごみする子じゃなくて、失敗しても「ああ、通じた」っていう喜びを味わって欲しかった。

日本を飛び出して違う国に行っても、「人のあたたかさ、それは同じだよ」ってことを感じて欲しかったですね。言葉が英語なだけで「人を思いやる気持ち」や、言葉が通じなくても「お互いを理解し合う気持ち」は万国共通。通じ合えるものを、見えないものを得て欲しかった。言葉は分からなくても、そのあたたかさ、その繋がり。だからこそ、その人に対して、今自分ができることを精一杯やって、それで心と心の繋がりができたらいいと思ってました。正直、どんなに英語力がある子でも、言いたいことが通じないもどかしさは感じるだろうと思っていました。文法に自信はなくとも伝えようという気持ちがある子は、電子辞書を片手に英語で果敢に会話に挑んでいました。そんな積極的な彼らの姿を見ているうちに、失敗を恐れないで、チャレンジしていく気持ちも英語の授業の中で育んでいかなければと思ったんです。

失敗を恐れて尻ごみするのではなく、失敗しても「ああ、通じた」っていう喜びの大きさを体験して欲しかった。その喜びは意欲に変わり、世界に飛び出してみようという勇気となっていくと信じています。

―10日間の研修を振り返る

「初めまして」は握手だった。でも違うよ、最後は。ギューーーだから。

絶えず自分を温かく見てくれる人が国外にいるっていう喜び、それを全員がすごく味わって帰ってきていると思います。向こうにいる時に既にそれを感じた子もいただろうし、帰る間際に「ああ、そうだったんだ」って思った子もいました。帰ってきてから「なんかすごく恋しくて、いっぱいメールしてます」って子もいます。

出会いの初日、「初めまして」は握手でした。でもアナハイムを発つ頃は、ギューーー（ってハグ）だから。出会えた喜びや家族のようにお世話になったという思いが、人を抱きしめるハグの強さになるんですね。それが見えない心と心の温かい交流なのだと思いました。この親善大使の交流事業は、30年以上水戸市とアナハイム市の人々の心を繋いできたからこそ、私たちがこんなにも温かいもてなしを受けられたのだとつくづく思います。学生たちは、確かに心と心になんとも言い表しようのない架け橋を架けたと実感しました。

学生が成長できた点から考えると、ほとんどの学生が、英語学習に対して「もっと話せるようになりたい」という向上心を持てたことではないかと思います。学生が水戸に帰ってきてから聞いてみたところ、10名の親善大使全員が、上手く伝えられなくて苦労したと答えていました。その経験が次のステップにつながるんですよね。あの時うまく伝えられなかったから、もっと勉強しよう、頑張ろうという気持ちになる。そういう気持ちを味わうことができたホームステイだったから、これは大成功だったと思います。

さよならパーティーにて（2列目右から2番目が森団長）

それから、アナハイムでは、小学校や市役所、市長との面会などたくさんの活動の中で、本当に水戸市学生親善大使としての自覚を持ち、立派に役目を果たしている学生たちの姿が印象的でした。世界に羽ばたく水戸人を育てるというこの事業の目的から考えても、大成功だったと言えます。

―未来の学生親善大使へアドバイス

思いっきり飛び込む勇気を。間違ってても いい！

この親善大使事業は、教室の中だけの英語学習では味わえない、本当に貴重な体験ができると思います。それは、行ってみないと味わえない。私は、飛び込む勇気さえあれば、英語はいつからでも学べると思っています。大人になってから、お爺ちゃん、お婆ちゃんになってからでも遅くはないと思うんです。「いつ」っていうのは自分が決めることだけど。飛び込んで、「もっと自分のことを話せるようになりたい。」「何で自分はこんなに乏しいボキャブラリーだけで話してるんだろう」という自分の課題に、まず自分が気づかないと向上心は湧かないものです。英語力をつけたいと思う向上心は、思いっきり飛び込む勇気と、少し通じたという喜びの両輪があって持てるものだと考えます。間違ってても いいから、未知のものにチャレンジしようっていう気持ちの方が、話せるか話せないかより大事だと思うんです。教室で勉強したことが「本当に通じるの?」っていう半信半疑でいいから、自分から行ってみる。そこで通じた喜びを感じたら、もっと話せるようになりたいと思うはず。だから勉強する―という思考ルートができあがる。自分がどうなりたいか自分で考え、どうすればよいのかが見えてきたときに向上心が湧き、一人一人の学びが始まるのでしょう。事業を終えた学生たちは、まさにそこに立っていると言えます。

30年以上にわたり、多くの人々を繋いできたこの事業だからこそ、アナハイムの人たちは水戸の子どもたちを誰よりも心待ちにしています。中高生の皆さん、目的を持ってこの機会に飛び込んでみてください。きっと世界を身近に感じるはずです。